特集
まえがき

特集　激増するシカ：今，日本の森林で何が起きているか

小林幹夫

読者のみなさんが，たまの休日に野山に出かけると，周囲の森林がことのほか明るく，遠くまで透けて見える状態に出会うにちがいない．森の中の地上部を林床と呼び，本来ならさまざまな低木や草が生い茂り，立錐の余地も無いはずである．今，このような本来あるべき森林の姿が，日本列島の主として太平洋側の地方から消失しつつある．

本特集は，シカの激増と，その結果としてもたらされた現状と直接向き合ってきた関係者からの報告である．『シカと日本の森林』の編著者・依光氏の蘊蓄を傾けた巻頭言に始まり，小金澤論文による栃木県・奥日光地域を事例としたシカの激増の生態系への影響に関する諸問題と，福島原発事故による放射能汚染の思わぬ影響；明石論文では，北海道における増えすぎたエゾシカに対する管理と保全；坂本論文では，四国・剣山系の実態と協働型の保全活動，そして塩谷・松田論文では，世界自然遺産・屋久島におけるヤクシカ対策と生態系保全のための問題提起へと続く．

本号ではレビュー論文3篇も特集に加えた．石川論文は，丹沢におけるシカの食圧による林床植生の衰退が引き起こした森林内の土壌侵食の実態を解明；高槻論文では，シカ問題が顕在化する遥か以前から今日まで，東北から奥多摩にかけ，シカの生態を基軸に据えた保全生態学的な研究過程を通した問題が提起される．日本は国土の7割が森林に覆われている．この国土に最も大きな影響を与えてきたのはヒトである．その原動力は国による林業政策の展開であり，山本論文は，森林政策学の立場からシカ問題に鋭く切りこんでいる．

第62回日本生態学会大会におけるシカ過採食問題に関するシンポジウム風景
（2015年3月21日，於鹿児島大学郡元キャンパス）

本号の書評欄には，若手猟師・千松信也氏の力作が紹介されており，ぜひご一読を！

本特集号でも明瞭だが，なぜシカが異常増殖し，現在なお激増を続けているのか；激増したシカ自体をどのように管理し，森林生態系の保全はいかにあるべきか，原因論，対処法や方向性をめぐり議論が分かれる．これまで，共通の認識を得るべく，日本生態学会や植生学会は幾度となくシンポジウム等を重ねてきた．2015年3月にも鹿児島大学で開催された大会では，シカ問題に関するシンポジウム，自由集会，そして企画集会に加え，ポスターの生態系保全部門で多数の論文発表があり，多くの会員が議論に参加した．本誌特集号の発行と軌を一にして，シカ防護柵による生態系保全の効果と限界に関する本が出版された．本特集の執筆者の多くがこれらの企画の関係者でもあり，本特集が時宜に適ったものであることを物語っている．

特集を組むにあたり，東京農工大学の梶光一教授，道総研環境科学研究センターの宇野裕之博士をはじめ，多くの関係者のご協力をいただいた．記してお礼を申し上げたい．

（こばやし・みきお：栃木，植物系統分類学）